

<書評論文>化粧をめぐる「当事者の視点」と「非主流性」：村澤博人『顔の文化誌』から考える（講談社学術文庫、2007）

著者	堀田 奈穂
雑誌名	KG社会学批評
号	12
ページ	13-23
発行年	2023-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030916

(1. 書評論文)

1-2. 化粧をめぐる「当事者の視点」と「非主流性」

——村澤博人『顔の文化誌』から考える——

(講談社学術文庫、2007)

堀田 奈穂

1 はじめに

自分の「顔」をどのように装うのか、もしくは装わないのか。それは、どのような化粧を選択するのか、もしくは化粧をしないという選択をするということであり、また、どのような髪型を選ぶのかということでもある。現代においてこうした判断は個人の自由である。自分がなりたい顔に近づくため、懸命に化粧方法を研究する人もいるだろう。「なりたい顔ランキング」や「美しい顔ランキング」といったランキングも、日本国内外に多く存在する。では、そうした顔への美しさを判断する感覚、つまり美意識は、現代に至るまでどのように醸成され、変化しているのだろうか。本書はこうした日本人が持っている顔に対する美意識の特徴を、古代から通史的に追うことによって考察している¹⁾。「顔に対する美意識」とはすなわち、顔に施す化粧がメインテーマであり、それに付随して本書では髪や美容に関しても論じられている。

本書の著者である村澤博人は、化粧文化論や化粧文化史を専門とし、長年ポーラ文化研究所に勤めた後、大阪樟蔭女子大学で教鞭をとった人物である。著者は、「顔に対する美意識や化粧観はその時代における顔のありようによって規定される」とともに、「その顔のありようはまた、その人個人のありようによって規定され、人のありようは社会やその時代の文化によって規定される」と考える(本書:3)。そのうえで、日本人の美意識を考察するため、絵巻や浮世絵を含む多くの資料を分析し、時には西洋や東アジア諸国の化粧文化にも言及するとともに、昔の白粉を再現し、自身に塗布することによって、実際にどのような見た目になるのかといった実験も行っている²⁾。

1) 本書は、1992年に刊行された単行本の文庫化であるが、文庫化に際して、「出版後15年ほどの年月を経ているので、1980年代以降についてはさらにまとめ直し」や「書き直し」が行われている(本書:279)。

2) この実験により、白粉を厚く塗ることは容易ではないということを著者自身が身をもって認識した。著者はこの結果から、従来言われてきた、平安貴族が白粉を顔に「壁のように厚く塗り、笑うとぼろぼろと剥がれ落ちる」ため、扇を用いてその様を隠していたという話は誤りでであろうと述べている(本書:32-6)。化粧は、「キャンバスになるのが生きている人間の『顔』や『からだ』」であり、多くの場合「一日の終わりには洗い落とされてしまう」ものである(山村 2016: 1)。そのため、顔に施された化粧が絵画のように残ることもなければ、ある時代に使われた化粧品がそのまま残っているということもほばない。よって、著者のように再現実験を交えた考察というのは非常に興味深いといえる。

ここで、本書の主題の一つとなっている化粧について、本稿での分析をより明確にするため、本書内の定義を以下に引用する。

化粧とは、簡単に述べると、なにかの目的のために、生まれつきの顔やからだの表面に顔料などを塗り付けたり、皮膚や毛髪や爪などからだの一部を変型させたり除去したりする行為である（本書：13）³⁾。

本稿でも上記の定義に従った「化粧」という言葉を用いる。

また、化粧に関して山村は、「時代や国・地域・民族によって化粧の基準は変わっても、世界中で化粧をしない民族はいないといっているだろう」と述べている（山村 2016: 4）。著者も本書冒頭で、「現代人が見るある時代に生きた人の顔の見え方と、その時代の人が見た見え方は違う」（本書：3）と述べている。これはつまり、同じ国の化粧や美意識であっても、時代によって異なる場合が往々にしてあるということであり、決して普遍のものではないということの意味している。

本稿では、本書の内容を踏まえ、化粧を実践する「当事者」に注目するという視点を導入し、その有用性を考察するとともに、化粧研究における主流性と非主流性について論じる。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、次節において本書の内容を紹介する。第3節では、本書に対する評者の評価を述べる。続く第4節では、本書の課題を指摘するとともに、評者の研究に引き付けつつ、本書の内容を民俗学的に発展させる可能性を検討する。最後の第5節では本稿のまとめを簡単に述べる。

2 本書の内容

本書は、はじめにとあとがきを除く全6章で構成されている。本書の特徴は、「正面顔文化」「横顔文化」「顔隠しの文化」といった用語を用い、古代から現代までの日本人の美意識を分析

3) このように、化粧には、毛髪や爪の加工が含まれている。化粧研究においては他の論者も毛髪等を含めた身体加工を化粧に含む傾向がある。たとえば、山村博美は化粧の定義を、「化粧を広い意味での身体加工ととらえるなら『入浴、洗髪、洗顔などでからだを清潔にする。髪を含む体毛を切り、結い、縮れさせる、あるいは抜くなどの加工をする。入れ墨や癩痕文身のように洗い落とせない身体変工をする。顔やからだの表面を紅や白粉などで彩色する。液体や軟膏などを塗って体表の手入れをする。美容整形などの医療行為によってからだの一部の形を変える』などが化粧に該当する」としている（山村 2016: 3）。また、石田かおりも、「『化粧』という語を、入浴・洗顔・洗髪・歯磨きといった日常の衛生的行為から、ひげ剃り、整髪、ヘアカット、パーマなどの、理容室や美容室で行なわれている行為、それに、スキンケア、メーキャップ、ボディペインティング、さらには、いれずみや抜歯、植・脱毛や、エステティックサロン、美容外科で行なわれていることなどの外科的身体変容までの、かなり広い範囲を想定して」用いている（石田 1995: 16-17）。なお、現在日常的に使用されている化粧という言葉から想定される、「ファンデーションや白粉などの肌づくりのアイテムと、口紅、頬紅、アイブロー、アイライナー、アイシャドー、マスカラなどのポイントメーキャップ製品を使った、顔にする化粧行為」に関しては、「メーキャップ」（もしくは「メイクアップ」）という表現が使われることが多い（石田 1995: 17）。

している点である。また、眉化粧への言及が非常に多いことも特徴である。それは、日本の化粧の歴史を振り返った際、「眉についての記述が多い」ためである（本書：14）。例えば、古くは『古事記』、『日本書紀』、『風土記』、『万葉集』等、様々な書物に眉化粧ないしは眉への言及が見て取れる。そのため、本書も眉への美意識についての記述からはじまっている。以下、各章の特徴を取り上げながら概要を述べていく。

第1章「古代から中世の顔」では、書物や絵画、埴輪なども手掛かりとして眉化粧をはじめ、白粉や紅の化粧、お歯黒といった、その後何百年と続いていく化粧のはじまりから記述が行われている。平安時代には眉化粧が「貴族文化が発達するとともに発展し、はっきりと眉毛を抜く化粧に変わっていった」（本書：40）。ただし、ただ眉毛を抜くだけではなく、抜いた後には眉毛を描く必要もあったが、この眉毛を描く位置は平安時代から鎌倉時代にかけて次第に本来の眉の位置から額際へ移動していることを指摘している。眉について著者は、「目や口以上に内面の動きを正直に映すものであり、心の動きや感情の起伏が、動きとして現れる場所である」（本書：59）とし、その眉を抜く、もしくは眉をすべて剃り落とすという行為は、「感情の動きを示す表示器としての機能が否定され、なおかつ眉の形からくる印象を感じさせることも否定」するものであり、「眉を通してのコミュニケーションが不能となる」と指摘している（本書：60）。

こうした化粧文化を踏まえ、著者は絵画に描かれた貴族の女性の姿から当時の日本人の顔の美意識を分析している。それは、「十二単を着て髪を垂髪にして、白くやや下ぶれくの丸顔にいわゆる引目鉤鼻と呼ばれる様式で目鼻立ち」が描かれている点であり、こうした美を「様式化された顔」と表現している（本書：53）。この美意識を著者は、「その後の日本の顔の文化を方向付けた点で重要であった」と位置付けている（本書：53）。

「様式化」と表現しているように、絵巻物の世界では美人は上記のような容姿で描かれ、個性や特徴といったものは感じられない。だが、対照的に、「顔立ちやからだつきが平均から外れる＝『醜』とされると、突然と言ってよいほど、その描写は具体的で写実性をもって」描かれる（本書：55）。つまり、「美＝様式化」であり、「醜＝具体、写実」という図式になることを明らかにしている（本書：55）。

そして、第1章の最後に著者は、顔の様式化を髪形とも関連させながら考察している。平安時代には、長い髪を垂らした垂髪という髪形が貴族の女性では一般的であり、この流行はその後長らく続いた⁴⁾。著者はこの垂髪と「耳挟み」という概念の関係を考察している。耳挟みとは平たく言うと、髪の長い人が前髪や横の髪を耳にかける姿である。平安時代にはこうした行

4) 飯島伸子は垂髪が長きにわたって続いた理由について、「垂れ髪が黒くまっすぐで光沢のある髪的美しさをもっともよく示せた」と同時に、「その髪型を男性が好んだからということもあった」と指摘している（飯島 1986: 71）。また、「丈なす黒髪は、労働はおろか普段のたちいふるまいにも不便なもので、しかも、ひきずるような衣装でないと似合わないということもあって、労働に従事する庶民の女性たちにとってはあこがれの髪型であっても、そうそう長い垂れ髪はできませんでしたから、そのころの女性たちにとっては、丈なす垂れ髪はまさしくステイタス・シンボル」であったと述べている（飯島 1986: 71-2）。

為を貴族が行うことははしたないこととされた。髪を耳にかけるということは顔がよく見えるということである。平安時代の貴族の女性は、御簾や几帳、扇や袖といった様々なもので顔を隠していたため、髪を耳にかけて顔を出す行為も嫌われたのである。著者はこうした「顔を直接見せない文化」を「顔隠しの文化」と呼び（本書：64）、「垂髪は顔を見せないための最適の髪型だったのである」と述べている（本書：65）。そして、引目鉤鼻として様式化された絵巻物も、「その根底に顔を見せない＝見ない＝隠す文化が存在したためと解釈できる」としたうえで、眉化粧についても、「内面の動きを外に見せないという意味で、顔隠しの文化の一翼を担っていたのであろう」と述べている（本書：65）。

第2章「日本的顔の美の成立」では、近世の化粧文化について記述されている。近世に入るあたりで、長らく続いていた垂髪の時代が終わり、髪を結びあげる日本髪が生まれ、普及していった。その結果、顔は露出するようになったが、「化粧を一種のベールとして使うようになり、顔を隠す文化は武家階級の女性達を中心に一層強化されていった」（本書：139）。

著者は浮世絵の分析を通し、真横から描かれた作品が非常に少ないため、日本では「横顔に対して関心がなく、感じるところが少なかったとみてよいだろう」と結論付けている（本書：97）。これは、平安時代から続く「中高」（なかだか）という美人を表す言葉との関連付けからきている。中高とは「顔で言えば真ん中が高いことから、鼻筋の通った良い顔立ち」を意味している（本書：38）。つまり、中高は正面から顔を認識しているが故の用語である。この点は第6章の紹介でもう少し詳しく述べる。

第1章および第2章で述べられてきた内容を通し、著者は日本の伝統的な美意識は「顔やからだを見せるものとして対象化しない、いい方を変えれば、顔やからだの存在感を明確にさせない美である」としている（本書：132）。そして、「江戸時代の武家社会で完成され、明治時代以降、政府によって一般に広められ、現代の伝統的な美意識につながっていく」ため、「日本人の美人像の変遷を考えるとときには、この点を押さえることが大変重要である」と主張している（本書：133）。

第3章「近代の顔へ」では、明治維新から第二次世界大戦終了までの顔の文化の変遷が描かれている。欧米化の影響で最も変化があったものは目の化粧に関してであった。欧米人と比較することで「はじめて目の凹凸感、立体感、奥行きを意識するようになった」のである（本書：151）。また、昭和10年頃にはパーマメントが一般に普及しはじめた。徐々に近代化、欧米化してきた顔や髪型であったが、第二次世界大戦の影響で化粧品は贅沢品とされ、パーマメントに関しても全国的に自粛が要請されるようになった。第3章ではこうした点への指摘がなされている。

第4章「戦後の顔と化粧」では、戦後、ハリウッド映画等のアメリカ文化の影響で化粧が欧米化していくとともに、顔や髪型の自由度が増していった過程が語られる。例えば、長らく断髪することを社会的に認められていなかった女性たちが、ショートカットにするようになったことがあげられている。各時代の流行を紹介しつつ、人々が徐々に「個性」や「自分らしさ」を追求するようになったと分析している。

第5章「現代の美意識」では、主に1980年代以降の美意識について論じている。女性のショートカットや男性のロングヘアといった男女の髪型の自由化や、女性の間で太い眉毛が流行したことにより、男女の外見のボーダーレス化が起こったと指摘している。

第6章「伝統的『顔隠し』の文化」では、著者が提唱している「正面顔文化」と「横顔文化」について詳述されている。「正面顔文化」とは「顔やからだの凹凸を減らし、存在感を（隠して、あるいは消去して）無にする」ものであり、「横顔文化」は「顔やからだの凹凸を強調して、存在感を（表して）明確にする」と定義している（本書：272）。著者は、日本人は「正面顔文化」であると同時に、「横顔文化」を嫌ってきたと主張する。第2章の概要でも述べた「中高」は正面から顔をとらえた言葉であるが、反対語である「中低」「ぐるり高」といった醜女を意味する言葉も含め、「いずれも正面から見た顔に対するこだわりが強い」ものであるとする（本書：261）。

こうした正面から見た顔にこだわり、横顔を嫌う由来を、著者は「横」という言葉が歴史的に持つ意味から読み解こうと試みる。そして、「横」には「よくない、正当でない意味を含んでおり」、「日本人は『横』という言葉に特別な思いがあるようだ」としている（本書：262）。そして、日本とは対照的に、横顔を古来より描き、コインのデザイン等にも採用してきた西洋の文化と比較する。その結果、西洋の文化において「横顔は単なるイメージではなく、まさに写実の世界であり、だからこそ横顔にその人らしさを求める文化が生まれて当然」であり、「ありのままを描くのが横顔文化の本質なのだろう」と推論する（本書：266）。そして、最後に、「正面顔文化」と「横顔文化」を洋服や表情等複数の観点から比較し、多様性を尊重する横顔文化の方が望ましいと結論付けている。

3 本書の特長

本書の特長の一つは、「顔隠しの文化」という概念を主軸に、日本の美意識を通史的に論じている点である⁵⁾。また、「顔隠しの文化」から発展し、「正面顔文化」と「横顔文化」という独自の用語を用いて日本と諸外国との顔の捉え方を比較している点も本書の特色である。

著者は「顔隠しの文化」について二つの側面を提示している。第一に「平安時代、外出時に実際に被衣などの被り物で物理的に顔を隠したような行為であり」、第二は、日本人がしばしば「表情が乏しいなどと指摘されるように、内面を表に出さない、あらわにしないという行為である」（本書：241）。後者の感情を表情に出さないという点については、平安時代から明治時代まで続いた眉を剃り落とす行為とも関連付け、「感情によって動かされる眉の存在を否定

5) 顔隠し自体については、他の研究者も言及している。例えば、増田美子も「日本における女性の顔隠しの始まりは平安時代前期と考えて間違いないであろう」（増田 2010: 6）と述べている。また、平松隆円は、顔隠しについて、「男性を際立たせるために女性の顔隠しがおこなわれたとも考えることができる」（平松 2020: 101）とし、そこから、「顔を隠すという本来の意味から顔を隠すための垂髪そのもの、そして垂髪のための長い髪を美とする意識へとかわっていく」（平松 2020: 103）と考察している。

し感情表出を隠すのに役立つ、と解釈できる」と述べている（本書：241）。

本書のもう一つの特長は、先述の「顔隠しの文化」からの派生として、日本人のからだに対する美意識を、存在感や立体感を嫌う文化と位置付けている点である。著者は着物を重ね合わせるということは「凹凸感の統一」に繋がり、それは「からだの線を不鮮明にし、しかも出すぎる胸は押さえてへこまし、立体感を避ける意識がある」とする（本書：95）。加えて、ヨーロッパの文化と比較し、日本では体臭や体毛、ホクロを避け、「からだの存在や実在感を消去する傾向が」根強いと指摘する（本書：260-1）。さらに、からだそのものだけではなく、日本ではアクセサリやタトゥーといった「からだに直接つけて存在感を意識させるような」ものの歴史は、「千年以上の空白」があるとする（本書：260）。千年以上の歴史とは、「律令時代に入ると、古墳時代まで使われていた装身具が消失し」たため、その後の「明治時代に入るまでの千年ほどの間」を指す（本書：30-1）。

以上のように、個々の事例に焦点を絞るのではなく、装飾品を含めた全体を通して、一つの価値観を抽出している点は注目に値する。全体を通した広範な視座からの考察とそれに基づく価値観の抽出は、各時代の社会や文化がいかに人々の顔やからだに影響を与えていたかを分析する大きな手掛かりとなるからである。このことは、今後現代の化粧文化を考えていく際にも有用であるといえよう。

4 本書の課題と展望

本節では、本書の課題を評者の研究テーマとも関連させながら検討する。評者の研究テーマは、化粧の実践者に焦点を当て、化粧をめぐる経験を民俗学的に調査することである。そのなかでも、化粧の実践において美容室はどのような役割を果たしているのかに関心がある。そのため、現時点では主に沖縄の美容室をフィールドに、フィールドワークやインタビュー等を通し、美容師をはじめとする様々な立場の当事者の話を分析する予定である。

まず、本書の課題として以下の二点を指摘したい。第一に、本書には化粧を実践する側の視点、つまり当事者の視点が欠如している。第二に、本書では主流的な化粧文化のみが扱われており、非主流的な化粧文化についての視点が欠如している。以下、それぞれの点について述べていく。

4.1 当事者の視点

第一の化粧を実践する側の視点の欠如について、例を二点挙げ、具体的に示す。

一点目として、本書では第二次世界大戦中の化粧について、国家からの規制の仕方を日本とアメリカで比較している。それは、「規制の仕方に、規制した側の化粧観を感じ取ることができる」からである（本書：166）。結果として、日本では化粧や化粧品は贅品として扱われ規制されたのに対して、アメリカでは一度規制されたものの、「女性の生産意欲を高めるために、ある程度の肌の手入れやメイクアップは欠かせないとし」て撤回された（本書：170）。

この比較自体はたしかに当時の国家の化粧に対する認識や化粧観を考えるうえで必要であろう。本書では、規制の結果、日本では「化粧、ヘアスタイル、服装に対する規制、あるいはそれらに対する町内会やいろいろな団体からの非難、あるいは国民服、翼賛髪など衣服やヘアスタイルの画一化により自由が奪われていく」ことになったとしている（本書：168-9）。

しかし、実際に化粧を実践する当事者たちの視点では、この限りではなかった。たしかに様々な規制を受け、主として化粧の実践者である女性たちは自由を奪われた面があるのは事実である。けれども、実際には戦時中でもパーマメントをかけた女性は多く存在し、衣服に関しても、戦争末期までモンペの着用は浸透していなかった（飯田 2020）。それどころか、電力規制によってパーマ機が使用できなくなると、美容師たちは木炭でパーマをかけるようになる⁶⁾。美容室には木炭は配給されないため、パーマに使用された木炭は客として来店する女性たちが各戸に配給された木炭をやりくりして持参したものであった（飯田 2020: 96）。

また、洋装に関しても、女性たちは国の規制にただ従ったのではなく、「奢侈批判の中で洋服をデパートや洋品店で買うのが難しくなると、女性たちは自分で洋服を作るため洋裁学校を目指した。洋裁学校に通えない女性は近所の洋裁学校卒業生に洋裁を習ったり、また洋服を仕立ててもらったりしていた」のである（飯田 2020: 265）。

このように、実際に化粧を実践していた人々に目を向けることで、異なった事実が浮かび上がってくる。著者は「戦後の混乱期を含めれば、20年近く、広くファッションのうごきはストップしてしまう。空白の時代である」（本書：166）としているが、実際には大都市からの疎開が「戦時中に起きていた流行の伝播にさらに拍車をかけ」（飯田 2020: 256）ていたのである。ファッションのうごきが止まるどころか「かなりの数の女性たちが洋装美にこだわり、その基準が戦時中に階層や地域を越えて広く共有され始め」ていたのである（飯田 2020: 38）。

二点目として、著者は本書執筆当時の若い女性の化粧への批判をしばしば行っている。例えば、第5章の最後では、現代は自由な時代になったにも関わらず「何を見ても『かわいい』と叫ぶ若い女性たちの画一化された言葉やしぐさに窮屈さを感じ」と、かわいらしさばかりを志向する若い女性たちを批判している（本書：235）。そして、「『何でもかわいらしいのがよい』というかわいらしさ信仰から解放され、『かわいらしさも一つ、ほかにも』という多様な見方がもっと表に出てきてほしい」と述べている（本書：235）。また、当時の流行のメイクを取り上げ、「日本の若い女性たちはマスカラをつけて一所懸命にまつげを強調するメイクに余念がない。それこそ横顔は、まつ毛だけが飛び出たバランスのない顔になっているのだが、本人たちは正面からしか見ないから気にならないようだ。彼女たちのメイクからモノの豊かさは感じて、美の多様性、文化の豊かさなどを感じることはできない」と、自身の提唱する「正面顔文化」と「横顔文化」を念頭に置きながら酷評している（本書：271）。だが、本当に多様

6) 飯田未希は日本各地の美容師の話として、「防空壕の中でもパーマをかけた」「空襲でもかけた」ということが多々あったことを紹介し、戦争末期でもパーマメントが人気だったことを証明している（飯田 2020: 79）。また、実際に戦時中も美容師をしていた沖縄初の女性美容師である新垣美登子は、疎開先の島根県でもパーマメントをかけ続け、山の奥からもお客が来るほどであったと述べている（三木編 1985）。

性や豊かさは存在していないのだろうか。評者は著者が見た「彼女たち」を実際に見ることは出来ない。しかし、評者には著者自身が「彼女たち」を画一的にとらえているように思えてならない。

著者は化粧の当事者にアンケートやインタビューを行ったわけではないため、自身が見た印象から感想を述べている感が否めない。著者が一言でまとめた「かわいらしさ」にも、個々人によって様々な種類があるのではないだろうか。数多くある「かわいい」と感じるものの中から自分に似合うもの、自分の好きなものを選んで組み合わせ、化粧をしているはずである。著者は、「彼女たち」にとっては何らかの意味があるものを、概括的に捉えてしまっているのではないだろうか。つまり、当事者の考えや価値観を一切考慮に入れていないのである。

また、著者は第6章において、「正面顔文化」と「横顔文化」における個のあり方について、「正面顔文化」では「皆同じを好み、人との違い、すなわち凹凸を減らす傾向がある」とし、「横顔文化」では「他人と違ってよいと思える」と述べており、多様性という視点では「横顔文化」の方が望ましいとしている（本書：276）。しかし、西洋が横顔を重視した文化だとするのは良いが、それがすなわち多様性を認めるということに繋がる論理や根拠が本書にはあまり見られない。

加えて、本当に多様性を尊重するのであれば、周囲と同じが良いと思っている個人の存在も尊重すべきである。目に見えて周囲と異なるものだけが個性ではない。

また、「正面顔文化」においても、周囲と同じ部分と自分だけの部分——例えば小さなアクセサリー一つや口紅一本といった違いであっても、本人が気に入る、自分なりの個性だと認識しているのであれば、たとえ多数と同じ化粧であったとしてもそれを画一的にとらえることは早計である。著者は、「正面顔文化」を目立った個性がなく、周囲と同じを好む文化だとしている。しかし、評者はここに、一見しただけではわからない、もしくはわかりにくい部分にこだわったり、工夫をしたりすることを好む文化という可能性もあるのではないかと考える。

以上のように、具体的に二点を挙げて本書における化粧の当事者の視点の欠如について指摘してきた。当事者の視点を導入することは、特に1990年代以降の化粧文化を考えるうえで重要であると評者は考える。日本では化粧は元来、社会規範や世間に要請された礼儀の一種であり、化粧をすること自体が批判されることはめったになかった⁷⁾。しかし、1980年代前半にアメリカから「ボディコンシャス」(body conscious)という概念が導入された。石田はこの「ボディコンシャス」の概念について、「原義は、文字通り身体を意識することである、すなわち常に自分の体形を意識して、よしとされる状態に保つべきであるという考え方」であるとしている（石田 2007: 18）。そのため、「『ボディコンシャス』の根幹には可塑的身体という概念が存在している、可塑的身体の概念は、『体型は自己責任である』という風潮を生み出す。さらに、『体型は自己責任』という考え方の根幹には、身体の自己所有物の意識、すなわち己の身体は己が可処分権を持つという考え方が存在している」としている（石田 2007: 18）。つ

7) 本書でもこのことについては言及しており、西欧ではキリスト教の影響と、当時の白粉の有毒性の観点から化粧批判論が古代より根強かったことと比較している（本書：139-140）。

まり、化粧が社会規範や世間からの要請としてではなく、個人の趣味嗜好としての意識が強まった現代の化粧文化を考えるうえでは、化粧を実践する個人＝当事者に注目する必要があるのである⁸⁾。

4.2 主流性と非主流性

次に、本書における主流性と非主流性について述べる。

著者は資料の都合上、「支配者階級の美意識の歴史が中心にならざるを得ない」という点を自覚している（本書：19）。本書に限らず、従来の化粧研究では支配者階級、つまり主流に位置する人々や、時代ごとの大きな流行に焦点が当てられることが多く、被支配者階級、つまり非主流に位置する人々の実際の化粧に関する文化にはあまり焦点が当てられてこなかった。しかし、化粧文化をトータルに捉えようとするならば、非主流的存在である被支配者階級の化粧文化にも目を向ける必要があるだろう⁹⁾。

また、地域に関しても、主流性と非主流性の観点から次のことがいえる。本書では、1980年代以降の日本の美意識を論じる際、メディアに登場する芸能人や雑誌等をもとに分析がなされているが、これはあくまで当時の大きな流行を分析する手法であるといえる。地域でいえば、どうしても東京などの大都市から発信された主流的な情報に偏ってしまうだろう。しかし、化粧文化には地域的な非主流性もあると評者は考える。

例えば、沖縄には「ウチナージラー」という言葉が存在する。これは「沖縄顔」を指す方言である。「ウチナー」は「沖縄」を、「ジラー」は「面」を意味し、沖縄でしばしばみられる濃い顔立ちのことをいう。このように、その地域特有の「顔」に関する方言が存在するということは、その地域の人々にとって、自身や周囲の人々の顔に関して、その地域独自の顔立ちが存在するという認識が存在しているということである。現代の沖縄においても、「ウチナージラー」を意識した話や化粧法が存在する。濃い顔を意識し、厚化粧をしているわけではないのに化粧をすることによって俗に言う「ケバい」顔になってしまうのを防ぐための化粧法等である。

このような、東京などの大都市から発信される主流的な化粧文化とは異なる非主流的な化粧文化に目を向けることには、一定の意味があるのではないだろうか。

8) 石田は、「ボディコンシャス」という概念の普及が発端となって、「体型は自己責任、可塑的身体、身体は自らの所有物であるからどのように扱ってもよい（可処分権を持つ）、これら一連の意識があって初めて、化粧の第一の意味が礼儀から個人の嗜好あるいは個人の利益へと変化しうる」としている（石田 2007: 19）。

9) 明治まで続いた眉をすべて剃るという行為では、江戸時代の上流階級の女性は眉を「そったあとに年齢や階級などを区別する別の眉を描いたのに対して、庶民の場合は、そるところまでは一緒でも、そのあとに、眉を描くことはなかった」（山村 2016: 81）。これは、「上流階級の礼法が庶民にまで降りていく過程で、眉をそるという基本の部分だけが庶民に定着した」（山村 2016: 81）ためである。また、眉を剃る時期は地域によっても違いがあったようである（山村 2016）。このように、支配者階級の文化が被支配者階級に降りてきた際、元の文化が微妙に改変されたり、新たな文化が生まれるということは往々にしてあるといえる。

4.3 今後の展望

以上のように、本書の課題として、当事者の視点の欠如及び非主流性への視点の欠如という二点を述べてきた。本節冒頭でも述べたように、評者の研究テーマは化粧の実践者に焦点を当て、化粧をめぐる経験を民俗学的に調査することであるため、評者の関心に即した指摘になってはいるが、本書及び現在の化粧研究において、上記の二点があまり議論されていないのは事実である。

また、化粧をめぐる経験を民俗学的に研究するということは、主流的立場からは離れた人々や地域にも目を向けるということである。島村恭則は民俗について以下のように定義している。

何らかの社会的コンテクストを共有する人びとの一人としての個人の生世界において、生み出され、生きられる経験・知識・表現で、とくに、啓蒙主義的合理性では必ずしも割り切ることのできない、あるいは覇権主義や普遍主義、主流的・中心的思考とは相入れない、意識・感情・感覚をそこに見出すことができるもの、もしくは見出すことができると予期されるもの（島村 2020: 18）

化粧とは、人々の間に、そして個々人の中に存在する「生み出され、生きられる経験・知識・表現」である。そして、化粧を実践する人々のなかには必ずしも主流や中心的な思考とは相容れないものが存在する。そのため、化粧について民俗学的に研究することは、今まで見落とされてきた化粧の側面を明らかにすることに繋がるといえるだろう。

また、前項でも触れた通り、沖縄をはじめ、地方では本書の内容とは異なる別の論理や枠組みが存在するのではないかと思う。しかし、本書で提唱されている「正面顔文化」や「横顔文化」、「顔隠しの文化」といった枠組みは、今後、フィールドワークをはじめとした調査をするうえでも、有効な概念であろう。地方ではどの程度この文化が浸透しているのか、もしくはしていないのか等、調査地で出会った民俗との類似点や相違点を比較する際の枠組みとして一考の価値があるからである。それは、第3節でも述べた通り、本書が提唱する「正面顔文化」や「横顔文化」、「顔隠しの文化」は、「顔」という言葉が入っているが、顔に限定することなく、からだ全体を通した価値観となっているからである。

5 おわりに

本書は、日本人の化粧について通史的に分析したうえで、「正面顔文化」「横顔文化」「顔隠しの文化」といった用語を用い、古代から現代に通じる日本人の美意識を論じている。また、顔に関する化粧観にこだわることなく、からだ全体を通した美意識を論じている点に本書の特色がある。

本稿では、上記の内容を踏まえ、本書の課題として、当事者の視点及び非主流性への視点の欠如を述べた。当事者の視点や、地方の化粧に関する経験を調査する視点を追加することは、本書の内容をさらに発展させ深化させるものであると評者は考える。また、主流的な位置にある大都市の話や雑誌等のメディアが発信する内容を分析することに終始しがちであった従来の化粧文化研究の課題を乗り越え得るものであるといえるだろう。

また、本書では1980年代以降の化粧に関しては否定的な評価がなされることが多かったが、外側から画一的に捉えているきらいがあるため、当事者の視点から考察することにより、また新たな発見があるのではないかと考え、上記の指摘を行った。

当事者の経験や地域特有の経験を収集し分析することで、本書が提示する「正面顔文化」と「横顔文化」、そして「顔隠しの文化」といった美意識についてもより深く理論化できるのではないかと考える。

【参考文献】

- 飯島伸子, 1986, 『髪の世界史』日本評論社.
- 飯田未希, 2020, 『非国民な女たち——戦時下のパーマとモンペ』中央公論新社.
- 石田かおり, 1995, 『現象学的化粧論 おしゃれの哲学』理想社.
- , 2007, 「わが国における化粧の社会的意味の変化について——化粧教育のための現象学的試論」『駒沢女子大学研究紀要』14: 13-24.
- 島村恭則, 2020, 『民俗学を生きる——ヴァナキュラー研究への道』晃洋書房.
- 平松隆円, 2020, 『新装版 化粧にみる日本文化——だれのためによそおうのか?』水曜社.
- 増田美子, 2010, 「日本女性の顔隠しの始まりと被衣」増田美子編『花嫁はなぜ顔を隠すのか』悠書館, 2-43.
- 三木健編, 1985, 『那覇女の軌跡——新垣美登子 85歳記念出版』潮の会.
- 山村博美, 2016, 『化粧の日本史——美意識の移りかわり』吉川弘文館.